

主体的に物語を読む学習活動をめざして

—現代の高校生は「舞姫」をどう読んだか—

杉 浦 直 也

はじめに

本校は、生徒の多くが大学・短大への進路を希望する進学校である。生徒は授業だけでなく、部活動や文化祭、体育祭、球技大会、合唱コンクールなどの学校行事に熱心に取り組み、高校生活を積極的に楽しんでいる。学習活動においては、基本的な学習態度が身に付いているものが多く、プリントや小テスト、創作課題などもそつなくこなす生徒が多いが、学習活動に対して受動的で、指導者の板書をぼんやりと待っている学習者も散見する。そこで、学習者が主体的に、生き生きと取り組めるような学習活動を試みているのであるが、なかなか成果が現れない厳しい現状がある。

1 授業計画

(1) 教材観と授業のねらい

教科書は第一学習社「改訂版現代文」であり、「舞姫」全文が載っている。

私は、森鷗外「舞姫」を今まで授業で扱ったことがなかったので、学習者が「舞姫」をどのように読むのか、ほとんど見当がつかなかった。「太田豊太郎はひどい男だ、最低な男だ」などという感想が多いのか、などと予想していた。これが、今回の「舞姫」の出発点である。

しかし、実際に授業で取り上げてみると、「舞姫」に対する色々な<読み>が出てきたので大変興味深い考察となった。太田豊太郎の生き方に深い理解を示す<読み>も多々出てきたので、私自身も大きな驚きであった。

本稿では、今から120年以上前の明治期の日本で執筆された「舞姫」という物語を、現代の高校生はどのように読んだのかを中心に考察したい。そこで、次の3点を学習活動の最後に、課題として考察させた。

(ア) 「舞姫」はなぜ、30年以上も教科書に載り続けているのか。

(イ) 「舞姫」から何を学ぶべきなのか

(ウ) 「舞姫」から自分で小テーマを設定して、考察する。

これらに対する学習者の考察も、授業実践の様子と合わせて報告し考察したい。

石原千秋氏は、「舞姫」について次のように指摘している。

『羅生門』も『山月記』も『ころ』も『舞姫』も、『エゴイズムはいけません』といういかにも道徳的なメッセージを教えることができる教材なのだ。戦後の学校空間で行われる国語教育は、詰まるところ道徳教育なのである。(引用者・中略)

『ころ』は、改めて言うまでもなく、友情と恋愛とを天秤に掛けて、恋愛を取った<先生>の「エゴイズム」が問題とされる。『舞姫』もある意味では同様に、立身出世と恋愛とを天秤に掛けた主人公が立身出世を取った「エゴイズム」が、「近代的自我」の未熟さを証明していることになるはずである^(注1)。

今回の学習活動では、石原千秋氏が指摘する「『エゴイズムはいけません』といういかにも道徳的なメッセージを教えることができる教材」以外の何かが見えてこないかと考え、単元を構成した。

現在、本校の3年生の現代文3単位担当している。4月に扱った阿部公房「赤い繭」では、語り手の男が、「自分がどのようにして赤い繭になり、そして消滅したか」を、読者に語るということに興味を示した学習者は多かった。そこで、今回の学習活動では、サイゴンの港に停泊中の船の中で、エリスとの出会いから別れまでを語る「余」(太田豊太郎自身)にも焦点をあてて、「余」がなぜエリスとの出会いから別れまでの手記を書いたのか、また、そのような手記を学習者はどのように受け止めるかということも、あわせて取り上げた。

(2) 単元目標

- ① 表現に即して主体的に作品を読む。
- ② 語り手に着目しながら読解することによって作品をさらに深く理解する。
- ③ 学習内容をふまえて「舞姫」という物語を深く考察する。
- ④ 課題を読み合うことによって、この作品のテーマについて様々な角度から理解しようとする。

(3) 実施時期

本校の3年生5クラス(210名)で2013年5月から7月にかけて合計14時間をかけて実施した。

2 学習・指導の展開

(1) 第1時～第12時

・理系クラスも担当していたので、「舞姫」の擬古文は学習者が読むことに大きな抵抗感を

持ち、学習活動そのものにも興味・関心を失ってしまうことを危惧し、今回の学習活動では最初に井上靖訳「舞姫」^(注2)の現代語訳を配布しておき、一度通読しておくように指示した。

- ・各段落ごとに学習者がまずその段落の現代語訳を黙読した上で、朗読テープを聴きながら擬古文の教科書本文を黙読した。次に、各段落ごとの読解プリントを用いて読み進めた。読解プリントはNo.1からNo.7までの7枚を用いた。

まず、学習者はプリントの設問に自分の考えを記入する。その後、指導者が学習者を適宜指名しながら読解していくという形をとる。最後には、指導者が学習者の考えを取り入れながら説明を加え、まとめの板書をした。

- ・教科書本文の読解では、語り手である、太田豊太郎の「余」が「エリス」と出会う場面までは、物語の舞台、登場人物、ストーリー展開を中心に確認していった、詳細な読解はしなかった。その後、「余」が教会の前でエリスと出会い、恋に落ちる場面から、エリスの屋根裏部屋で暮らし、エリスが懐妊しているにもかかわらず、天方伯と帰国する約束する場面までは、登場人物の心理を考えながら詳細に読解した。

(2) 第13時 課題『舞姫』をどう読んだか』を書く

「舞姫」の学習活動の最後に、次の3点を課題として考察させた。

- (ア) 「舞姫」はなぜ、30年以上も教科書に載り続けているのか。
- (イ) 「舞姫」から何を学ぶべきなのか
- (ウ) 「舞姫」から自分で小テーマを設定して、考察する。

なお、(ウ)で学習者に示した小テーマの例は、「豊太郎という人間を考える」、「エリスという人間を考える」、「天方大臣との約束－日本に帰ることを天方大臣にその場で約束したこと」、「相沢という人間を考える」、「豊太郎はなぜこの手記を書いたのか」などである。

(3) 第14時 課題『舞姫』をどう読んだか』を読み合う

提出された課題「『舞姫』をどう読んだか」を机の縦1列7名のグループ内で読み合い、それぞれ簡単な記録をとった。

3 実践をふりかえって

(1) 「舞姫」の本文の読解

学習活動で用いたプリントと、そのプリントに対して学習者が記述した内容を次に挙げる。なお、*は学習者が記述した内容である。

問1、母が豊太郎にあてた手紙の内容は、どのようなものだったのだろうか。

- * 豊太郎にドイツでしっかり勉強してもらい、立身出世してほしかったのに、女性問題で免官されて、母はとても悲しく、情けないという内容。
- * 豊太郎を厳しく叱るような内容。

問2、エリスとの「憂きがなかにも楽しき月日」の生活についてどのような印象を受けたか。

- * 免官されて、毎日の生活を送るので精一杯だが、エリスと共に夫婦のような生活ができるので楽しい。
- * 国からの信用を失ってしまい、これからどうしていいのか、分からない。

問3、エリスに関する相沢の忠告（エリスとの交わりを「意を決して絶てと」）について、自分の考えを述べよ。

- * 相沢の忠告はもっともである。豊太郎は国費留学生であるし、このままでは二度と名誉を回復することができないので、エリスとの関係を絶つべきだと思う。しかし、豊太郎の心の葛藤も理解できる。
- * 相沢は、非常に能力の高い豊太郎が、このまま埋もれてしまうのがもったいないと思い、この発言をしたので、もっともな発言だと思う。

問1から問3の設問では、まず段落ごとに学習者が通読した後で、それぞれに記述する。ここでは本文の表現に即して考えることを心掛けさせた。なぜなら、問1のように、豊太郎の母親の手紙の内容は直接記述されていなくても、「余」の心理や行動からうかがうことができるからである。中には、本文の表現を深読みしすぎた恣意的な読みや誤読に近い読みも散見されたが、多くの学習者がしっかりと「余」の心理・行動や本文の表現をふまえて、それぞれを考察していた。

「舞姫」の本文の読解では、豊太郎がエリスと出会うまでは受動的な学習者が多々見受けられたが、エリスと出会ってからは、内容に興味を示し、主体的に取り組む学習者が多くなってきた。

なお、学習者が「舞姫」の学習活動に、主体的に興味を持って学習に取り組めるよう、工夫した点は、次のとおりである。

- ・井上靖訳「舞姫」を学習者に事前に配布したことにより、内容がつかめないという声はほとんど聞かれなかったこと。古文の文法と単語が用いられている「舞姫」を原文で読解することは、現代の高校生にはきわめて難解であると考える。
- ・人物や社会状況の写真などの視覚教材を多く使い、学習者がイメージを持ちやすいようにしたこと。たとえば、「舞姫」冒頭の「石炭をばはや積み果てつ」では、人々が石炭を船に積み込む様子や、当時の乗船風景のイラストなどを紹介した。

また、母からの手紙を豊太郎が読む場面では、明治時代の巻物の手紙の写真などを紹介したところ、学習者からは達筆すぎて読めないなどの感想があがった。

- ・ストーリー展開を確認するときは、漫画なども適宜用いたこと。
- ・豊太郎がエリスと出会い、エリスが豊太郎の手の甲に涙を落とした場面や、豊太郎とエリスの屋根裏部屋での生活の場面などは、プリントにイラストを書かせたところ、学習者は大変興味を持って、取り組んでいた。イラストが完成する頃に、近くの人々のイラストをお互いに参考のために見るようにと指示を出したところ、教室のあちこちで歓声があがった。

(2) 課題「『舞姫』をどう読んだか」についての考察

学習活動の最後に、「『舞姫』をどう読んだか」について、前述の3つの課題に答える作文を書かせた。

これらに対する生徒の作文を、それぞれ考察してみたい。

(ア) 「舞姫」はなぜ、30年以上も教科書に載り続けているのか。

【学習者の考察から】

- ・学校とは何を学ぶべき場所なのだろうか。この「舞姫」から考えてみると改めて分かる。たとえ、国から認められるほど頭が良くても、伝えるべきことは偽りなく伝える。相手の誘いにはよく考えてから応じるなど、人として肝心な事ができなければダメだと思うのだ。「舞姫」が教科書に載っているのは、勉強だけでなく、人として大切なことを忘れてはならないということを私たちに改めて学んでほしいからだと思う。
- ・「舞姫」は、「羅生門」、「こころ」、「山月記」と同じように、始めはエリートや好青年だった主人公が、あるキッカケにより、葛藤や苦悩を交えながら、最終的には主人公が過ちや後悔を起こしてしまうことになってしまう経緯や心情の変化を、多感な時期である高校生に読ませたいというねらいがあると思う。「舞姫」からは、思いやりを受けた相手にどう報いるか、また、もっと深く踏み込めば、人生の選択についても言及していて、自分の身の振り方を「舞姫」から学ぶべきだと思う。
- ・自分自身が豊太郎の立場に置かれたら、同じような行動をとらなかったのか、どのように行動すべきだったのかを、読者に考えてもらうために、教科書に載っているのだ。
- ・人の内面や感情の記述も豊かで、内容も深く、感受性を育てられるから。
- ・「舞姫」の魅力は、リアリティのある「人間」が描かれていることである。この作品から、私たちは「人間の心」について考えさせられるだろう。そして、各々が導き出した結論こそが、この作品から学ぶべきことなのだ。
- ・私はこの作品を読み終えた時、なぜこのような無責任な男の恋愛劇を授業でやるのだから

うと不思議に思った。しかし、その疑問を考えることに「舞姫」を学習する本当の目的であるとも思った。

- ・今の日本の基礎を築いた明治時代の人々の苦勞を知らない現代人に少しでもその氣持を知り、今の生活を見直してほしいという氣持があつて、教科書に載り続けているのだと思う。
- ・明治時代の社会狀況を知ることができるから。
- ・簡単には、外国に行けなかつた時代に、外国へ渡つた日本人の、外国風俗の感じ方や考え方を知ること。

ここでの学習者の考察からは、大きく分けると二つある。一つは、豊太郎の生き方から自分の生き方を考えてほしいということで、「各々が導き出した結論こそが、この作品から学ぶべきことなのだ」というような考察が多かつた。中には、「無責任な男の恋愛劇」から、反面教師的に考えるべきだ、などという厳しい意見もあつた。

もう一つは、今の日本の基礎を築いた明治時代の人の苦勞を知ってほしいということである。中には、当時の西洋諸国（イギリス、フランス、ドイツ、など）から、政治や法律、外交、教育、交通、文化などを学んだ、明治時代の知識人たちの苦勞に言及する考察もあつた。

しかし、授業では、120年前の日本の狀況をとらえることが不十分であつた。「1885年頃の日本」を4人1組のグループで考えて、黒板に板書させるという言語活動を取り入れられたら、「当時の日本の狀況」を学習者はもっとイメージできたのではと、大きな反省点として残つた。

(イ) 「舞姫」から何を学ぶべきなのか

【学習者の考察から】

- ・この作品では、「責任」と「選択」が重要なキーワードになってくる。相沢がくれたチャンスは、愛おしいエリスとの決別を意味していた究極の二択であつた。私たちは社会に出ると全ての物事に責任がついてくるし、自分自身で選択・判断しなければならない。そういったことを考えさせたいために、教科書に載っているのではないか。
- ・私がこの作品から学んだことは、人の弱さである。鷗外はおそらく人間の弱さや醜さを私たちに伝えたかつたのだろう。
- ・この作品を通して、人としての幸せとは何かを学ぶことができる。
- ・人間の欲である。出世したい、自分の地位を保ちたい。それが叶えば、周りを犠牲にしてもよいのだろうか。
- ・豊太郎の人としての優しさ、思いやりや友情と恋愛の狭間で揺れ動く心の葛藤や人間のずるさや迷い、環境により窮地により変化する心などがリアルに描かれている作品であ

るので、自分であればその場面や状況で、どのように行動したのかを考え、学ぶべきだ。
 ・「舞姫」から、人間の二面性を学ぶべきだと思う。豊太郎はエリスの前ではよい顔をして、ずっとエリスと暮らしていくと約束しているが、相沢の誘いを受けるとすぐに日本に戻ろうとする。つまり、エリスと暮らさないと決断をした。このことより、私は「人間の二面性」を学ぶべきだと思った。

ここでの学習者の考察は多岐に及んだ。いずれの考察も豊太郎の生き方から、人間の欲深さ、弱さ、醜さ、ずるさ、二面性など他者よりも自分を優先する利己心を指摘する考察が目立った。

これらの学習者の考察からは、石原千秋氏が指摘する、『『エゴイズムはいけません』といういかにも道徳的なメッセージ』を、学習者は読み取っていると考える。では、「道徳的なメッセージ」以外にはないのだろうか。次の(ウ)で、さらに考えてみたい。

(ウ) 「舞姫」から自分で小テーマを設定して、考察する。

【学習者の考察から】

A 「豊太郎について」

- ・豊太郎は一見すると、とても愚かな人間のように見えるが、共感できる部分も多いのではないかと。たとえば、社会的な地位やもとの暮らしを取り戻したいと考え、エリスを裏切ったシーン。長所も短所も持ち合わせた彼の心の揺れ動きこそが、この作品の最も惹きつけられるところではないだろうか。
- ・豊太郎が失ったものを再び得るために、手に入れたものを手放すという流れの中での、豊太郎の心の葛藤は、良くも悪くも人間的であり、現実的なものである。それらの心情を理解し、自分に置き換えたりしながら、リアルな心情を考察することができるのが、この作品で学ぶべきことだ。
- ・豊太郎は物語の人物ではなく、私たち人間の心の弱さを描いた人物ではないかと考える。
- ・私は、豊太郎は「人間の弱い部分」を具現化したものだと思った。なぜなら、豊太郎はあらゆる自分の目先の欲に負けているからだ。
- ・豊太郎は何もかも他人まかせで、自分が一番かわいい人だと思う。自分の将来のことと、エリスとの愛の間で揺れてしまうのも分かるが、いつも最後に決断するのは自分ではなく、周りの人間で、豊太郎もそうなることを期待しているように感じた。
- ・私は「舞姫」を読み終えたとき、「豊太郎は何て薄情で冷たく、人間味のない人なんだ」と、嫌になった。
- ・よく考えもせずにエリスを懐妊させ、相沢の手紙では都合の悪い部分を伏せ、天方伯の誘いにのり、最後までエリスに本当のことを言えなかった豊太郎は馬鹿だと思いました。

最初の授業計画のところでも述べたが、授業を始める前まで私は「豊太郎はひどい男だ、最低な男だ」などという考察がほとんどではないかと考えていた。しかし、学習者の考察は、「とても愚かな人間のように見えるが、共感できる部分も多い」や「豊太郎の心の葛藤は、良くも悪くも人間的であり、現実的なものである」というような、豊太郎の行動に理解を示すものが目立った。

現代の高校生たちは、人間とは「長所も短所も持ち合わせた」弱い存在と考え、豊太郎の生き方を批判しつつも「人間らしい」と共感しているのである。また、人間の生き方とは綺麗事ではすまされないことも、各々の人生体験から痛切に感じているのであろう。

「道徳的なメッセージ」をさらに深めて、人間の存在そのものについて深く考察していると私は考える。

しかし、一方で「豊太郎は何もかも他人まかせで、自分が一番かわいい人だ」や「薄情で冷たく、人間味のない人」、「豊太郎は馬鹿だ」というような、豊太郎の自分本位な生き方を厳しく批判する意見も散見された。こちらは、「舞姫」から「道徳的なメッセージ」を読み取っていると見えよう。

B 「豊太郎はなぜこの手記を書いたのか」

- ・自分がエリスを裏切ったのは、やむをえずそれしか選択のしようがなかったのだと分かってほしかった、そして犯した過ちに対して自分の心を納得させるためにも、この手記を書いたと考える。この「舞姫」を通じて、豊太郎を批判するだけでなく、自分だったら、どのように行動すべきかなど、色々なことを感じ、生かしてもらいたかったから、この手記を書いたのではないか。
 - ・自分のエリスへの愛と自分の名誉と地位について。どちらも捨てきれないという気持ちの中、せかされたように、最後は決断したことで、手記に書くことで、その思いを残せると思ったのではないか。罪悪感が薄れるでもなく、エリスを忘れるためでもない。豊太郎は、一生このことを忘れずに、常に背負っていったのだろう。
 - ・豊太郎は、他の人に自分と同じ体験をしてほしくなかったと考える。そして、これに記すことでエリスに謝罪したかったのだと思う。
 - ・自分の後悔を書くことで、自分を戒めるため。
- ここでの考察からは、「犯した過ちに対して自分の心を納得させるため」や、「自分が決断した思いを手記に書くことで残す」や「エリスへの謝罪」の念というような考察が出てきた。

C 「相沢について」

- ・エリスとの交際を絶てという相沢の忠告は、豊太郎やエリスにしてみれば冷酷であり、

情のない言葉と感じられる。しかし、自分の意志がはっきりしない豊太郎のことを思えば、相沢は唯一の理解者であると思う。そしてこの忠告は、「出世をしたい」という気持がどこかにある豊太郎に対して情があってこそ出てきたものなのだと思う。

- ・豊太郎にエリスとの交際を絶てと忠告した相沢は、豊太郎の今ではなく、豊太郎の未来について考えたのだと思う。相沢は、豊太郎と国家の未来を見据えて、とても惜しく思い、豊太郎に忠告したのだと思う。

D 「エリスについて」

- ・エリスという人は、豊太郎の愛にすがって生きています。一人ではお腹の子を育てることはできないし、仕事も解雇され、老いた母と生きることは不可能に近いことが分かっていて、自分とは住む世界の違う豊太郎が、いつ自分や子どもを捨ててしまうのではとビクビクしながら生きていた。

だから、豊太郎が倒れた後に相沢から豊太郎の裏切りを聞いて、心を病んでしまった。これは、今までの心の疲労と、このときのショックで、正常に生きていくのが辛く、自分の心を守ったのだと思う。現実と向き合うのが辛くて、エリスは現実から逃げ出した。このことから、エリスは心の強い人ではなかったことがわかる。

相沢やエリスについての考察からは、感情的にはなく、しっかりとその人物の立場になって考えていることが分かる。自分では大事なことが何一つ決定できない豊太郎を、めぐる周囲の人物たちを、その状況を分析して考察しているのである。豊太郎だけでなく、相沢やエリスといった人物の生き方も、学習者にとっては非常に印象に残り、考えさせられたようである。

(3) 課題『『舞姫』をどう読んだか』の読み合い活動について

以下に、ある学習者が本時の活動で作成した記録用紙の抜粋をあげる。

【授業時に用いた記録用紙から】(実際は B5)

氏名	良いと思った点、共感した点、自分が気づけなかった点、など
B	人間の意志の弱さ、逆境への弱さ、醜さを伝えている。
C	今の日本の基礎を築いた明治時代の苦労を知らない現代人に読んでほしい。
D	自分が同じ立場だったらと考えさせるための作品。
E	当時、恋愛は国家のために尽くすことに較べれば、くだらないことだったのか。
F	人生における取捨選択。

また、この読み合い活動の最後には、友達の作文を通じて発見したことや考えが深まったこと、共感したことなどを記入させた。以下にいくつかの学習者のまとめを挙げる。

【学習者の考察から】

- ・人によって目のつけどころがちがうことに驚きました。
- ・自分では、気づかなかった点に気づけてよかった。
- ・恋愛をよく思わない当時では、仕事と恋愛を比べてはいけなかった。自分の意志で決断しているように見えて、実は社会的な傾向に流されていたのではないか。
- ・自分という「個」を持っていないと、心も言葉もどんどんぶれて、自分も相手も傷つけてしまうと分かった。

「舞姫」という作品についての<読み>を交流させようとお互いの作品を読み合う活動を行ったが、他者のさまざまな考察を知ることによって「舞姫」を多角的に理解できたという学習者の声も多かった。「とても良かった」や「見ていて楽しかった」などという意見は、指導者にとっては大きな喜びであった。

おわりに

今回、私は初めて「舞姫」を授業で扱った。ふだん以上に学習者の考察にしっかりと向き合え、「現代の高校生はこんなふうには、120年以上前に書かれた『舞姫』を読むのだ」と、発見や驚きの連続であったし、私自身も大変勉強になった。さらに、学習者は、「舞姫」から「道徳的なメッセージ」以外の多くのメッセージを読み取っていたことは、大きな驚きであった。

しかし、多くの課題も残った。大きな課題を挙げてみると次のとおりである。

- ① 明治という時代背景をふくめた「舞姫」の読解。
- ② 語り手に着目した指導によって、学習者にとっては何が見えてくるのか。
- ③ 読書生活へいかに発展させてゆくか。

これらのことを念頭に置きながら、主体的に物語を読む学習活動を今後も探究してゆきたい。

注

- (1) 石原千秋「定番教材の思想」(『国語教科書の思想』ちくま新書 2005年)
- (2) 森鷗外『舞姫 現代語訳』井上靖訳 ちくま文庫 2006年
(すぎうら なおや・神奈川県立麻溝台高等学校)